

柴田隆行先生追悼特集

【二〇一九年度哲学堂祭記念講演録】

カントと「現象の救い」

柴田隆行

shibata takayuki

みなさま、こんにちは。柴田と申します。私は大学教員になって四二年ぐらいなんですけど、四二年間の中でも一番目、二番目くらいに今日は緊張しています。常務理事、その他大變偉い先生方の前でお話するということで、面接よりもつらい感じなんですけど、ただありがたいことに照明がまぶしくて、みなさまの方がよく見えません。その点はちょっと気が楽になるんじゃないかと思っています。

先ほどの四聖祭でもお話が出ましたように、哲学というものをめぐって百年間も「哲学堂祭」という行事が続いているというのは、世界中探しても相当珍しいのではないかと思います。そういう席で記念講演をさせていただくということは、非常に光榮に思っております、関係者のみなさまに御礼申し上げます。

さて、今年二〇一九年九月五日に第七回国際井上円了学会が開催されましたが、その全体テーマが哲学堂公園でした。いくつもの興味深い発表がありました。東洋大学非常勤講師の佐藤厚先生が哲学堂祭について詳しく踏み込んだ研究報告をされました。それによりますと、この哲学堂祭というのは井上円了先生の遺言に基づいて

毎年開催されていて、途中で開かれなかったことなどもあったようですが、未開催も含めてカウントすると、今日は第一〇一回目になるそうです。

この記念講演とその前の墓前祭、四聖祭の三点セットを実施するほか、甘酒、コーヒー、お茶を振る舞うということも遺言に基づいているようです。先ほど佐藤先生に、円了先生の時代にコーヒーってことはないだろうか、甘酒、お茶ぐらいじやなかったのかと伺ったら、むしろ逆だというんですね。遺言には甘酒、コーヒーは書いてあるけど、お茶は載っていないんだそうです。円了先生が亡くなったのは大正八年ですから、その頃に甘酒、コーヒーと書くというのは相当ハイカラといえますか、さすがにあの時代に三度も世界旅行をされた方だな、と認識を新たにしました。

それでこの記念講演ですけれども、日本を代表する数々の哲学の先生がここで講演をされました。東京大で最初に哲学を始めた井上哲次郎、そして三宅雪嶺、三枝博音、出隆といった方々や、また私が指導を受けた園田義道先生や飯島宗亨先生、あるいは大村晴雄先生、高峯一愚先生といった方々もここでお話しされています。そのような場に私が立つことが出来ているというのは、先ほど申しましたように大変光栄に思います。

今年も順番で言いますと、四聖のうちのカントの年になります。そこで本日の講演タイトルを、「カントと『現象の救い』」としました。実は私は何年か前にソクラテスについてこの場で話したことがあるので、今回で二回目になります。また、私の専門は一八世紀から一九世紀のドイツの哲学思想なので、カントならちよつと任せとけという感じもあるので、そういう意味でも多少は緊張がほぐれているかもしれません。

それでは本題に入ろうと思いますが、最初にごく私的な話から始めさせていただこうと思っています。私は学生の頃、当時日本で二番目に授業料が安いと言われていた神奈川大学に入学しました。一番安いのはどこだった

かというところ、国際基督教大学でした。神奈川大学の英語英文学科というところに入って卒業しました。ただ、私の学生時代は二年間がバリエードストライキ、自主ストライキだったので、実際に大学で学んだのは二年間だけでした。その二年間で、私のゼミの指導教授が信太正三という先生でした。ただ、私がゼミに入った時に、信太先生はすでに癌に侵されて入院されています。授業を受けたのは四回か五回。ゼミは自主的にやるところだったので、先生がいなくても勝手にやるしかありませんでしたが、単位はもらいました。

その四回か五回ほどの信太先生の授業で扱われたのが、ハイデガールの『ヒューマニズムについて』という本でした。その中に、例えば「言葉は存在の家である」といった一節がありますが、その一節をめぐって一時間半の授業でそれだけしか進まないんです。一回の授業で一行だけ。そういうすごく濃いゼミの授業を受けて、私は信太先生に大変な感銘を受けました。

その信太先生が、一九七〇年に東洋大学に移籍されたんです。飯島宗亨先生がお呼びになったと思うんですけども、私も後を追って着いて行きました。それで東洋大学の大学院に入ったのですが、その年の五月一日に先生がお亡くなりになってしまいました。そんなことで、私は信太先生の授業を東洋大学で受けることができませんでした。大学院ですので指導教員が変わって、それが暉峻凌三という先生でした。暉峻先生は字が難しいので、普段授業に来ていない学生は「きしゅん先生いますか?」とか言って、来てないことがバレるといふね。その暉峻先生のもとでフォイエルバッハというドイツの哲学者の本を読んいただきました。

それで信太先生の話に戻るんですけど、先生はですね、大正三年三月三日に三男として生まれたので、正三という名前がついたそうです。京都大学の哲学科を卒業して、その年の十二月に赤紙が来て戦争に呼び出されて、一九四六年二月までの六年間、中国の戦地で軍務についていました。六年間というのは学徒出陣でも長すぎるん

じゃないかという感じがするんですけど、先生に言わせると、上申書か何か出さなければいけない書類を出すのが嫌で、白紙で出したと。それで懲罰的に六年間も戦地にいることになったそうです。そして戦争が終わって、今の神奈川県である横浜専門学校の倫理学の教員となり、そして一九七〇年に東洋大学に移ることになります。

信太先生はニーチェ研究で有名なんですけれども、研究しながらも、どうしてもご自身の六年間の戦争体験というものを抜きには哲学を語れないとお考えになり、『私の戦争体験史』（理想社、一九六八年）という本を書くんです。戦争体験を体の中に刺さった棘として引き受け、自分自身の中にある根源的な悪みみたいなものを追求しなければならぬ。その悪に負けてはいけぬ。自分の中に刺さった棘を引き抜いて、何とかして根源悪から脱却して外に出て、新たに何かを追求する。そういう哲学を目指して、〈出撃としての実存〉——なかなか過激な表現ですけど——という言葉を作り出して提唱されました。〈実存〉というのは〈existence〉ですが、〈existence〉の〈ex〉は〈外〉、〈出口〉という意味です。その言葉を使って〈出撃としての実存〉と言われたわけです。その信太先生が、戦争が終わって学生生活に戻って最初に書かれた論文が「神なき救済論——哲学的素描」（『信太三研究』第六号、一九八七年、掲載（原文は一九四七年））というものです。中身を読むと〈現象の救い〉というのがテーマとなっていて、翌年「現象の救ひ——序章」（『望楼』Ⅲの2、一九四八年）という論文を書かれました。

そういうわけで、今日の「カントと『現象の救い』」というテーマは、私が信太先生と暉峻先生からの哲学的影響を受けて考えたものなんです。〈現象の救い〉というのはですね、プラトンとアリストテレスという古代ギリシャの哲学と関係しています。プラトンという人は、あらゆる現象の根源を追求してアイデアの世界、これは理想とか理念と訳されますけど、そのアイデアの世界を見出しました。アイデアの世界こそが真実の世界であると。そう

すると、現象の世界というのは、イデアの世界を象ったものを投影した影とみなされます。私たちが現実と言っているものは影にすぎず、真実はイデアの世界である。人々は今洞窟の中に生きていて、洞窟の壁に映った影を見て現実だと思い込んでいます。真実は洞窟から出た向こう側にあるのだ、とプラトンは言ったわけです。

これに対してプラトンのお弟子さんであるアリストテレスという人は、何か違うんじゃないかと考えました。むしろ私たちが現実に生きているこの世界の方が真実であって、それは決して影などではないと。プラトン先生が言うようにイデアというものが存在するとしても、それは向こうの世界に、つまりこの現実とかけ離れて存在するのではなく、むしろこの現実の中に存在するのではないか。ただし、それは現象として見えるものではありません。可能態、あるいは可能性ともいえますけど、可能性として隠れているものが様々な活動によって現実化する、そのようにして現れてくるわけです。それが現実の世界であって、決してあの世とこの世が分かれていて、こちらの世界が影だというわけではないとアリストテレスは考えました。そして、その可能性が現実化するという運動のことをギリシャ語でエネルギー、現代の英語ではエネルギーと言います。人間が様々なことをエネルギーするというのは、決してどこから降ってくるのではなく、自分の中の可能性、自分の中に存在するイデアをどうやって発現するか、どうやって出すかということになります。こうしたアリストテレスの考えを受けて信太先生は、哲学というのはあくまでもこの世界の現象を扱い、現象を徹底的に究明する理論的探究だとまとめました。つまり哲学は世界の生成変化を理論的に説明する営みだということです。

ところがよく考えてみると、アリストテレスという人が実際に何をやったかというところ、理論的な探究を行っただけであり、現実の世界にどの程度触れることができたのかは怪しい部分があります。むしろ、現実の世界は影に過ぎないと言ったプラトンの方が、世の中を改革する運動に実践的・具体的に組み込んでいます。さらに

もつと遡ると、プラトンの先生であり、プラトンが哲学というものに目覚めてそれを知りたいと思わせたソクラテス、そのソクラテスこそが、人間の現実存在というものを探究すべき対象だと考えたんです。ですので、現象の救い、現象の世界というものを探究するための考え方としてはアリストテレスの方がいいけれども、さらに踏み込んで考えてみると、やはりソクラテスまで遡る必要があるのではないか。そのようなことを信太先生は考えておられたのだと思います。

私の言葉で言えば、いくら哲学だとか真理の探究だとか言っても、哲学を思索している人間自身、たとえば自身は現実を離れることができない。そうすると、現実の生身の人間として、肉体を持った存在者がどこまで現実世界を追求できるのかを考えていかなければならない。信太先生の言葉を借りれば、身体としてでなければ、人間は血肉をもった内面性を持つことができない。受肉した内面性を身体として生きるところに、われわれは各々、真に現実に残存する。信太先生はこのようにまとめておられます。

晩年の著作に書いてあることなんです、信太先生は胃癌だったので、食べることができなくなっていました。今は点滴も良くなってきて、点滴で太る人もいるらしいですが、その頃は点滴だけでガリガリになっておられました。私は毎週のように自転車に乗ってお見舞いに行っただけですが、その偉い先生がいつも行くと痛いと行って、背中をさすってくれと言っただけです。それで背中をさすんですが、ガリガリでどこに肉があるんだかもわからない。背骨だけがゴツゴツしていて。そういうことを毎週、非常に悲しい日々であったなと今急に思い出しました。信太先生の思想としては身体ということをおっしゃっていたわけですが、その先生の身体は完全に癌に蝕まれていたんです。

その身体的重要性ということ、哲学的にかなり早い段階から、つまり一九世紀の初めから訴えていた人がフォ

イエルバツハという人です。彼は、理性を語る自分自身がやはり感性的な存在であるという考えをヘーゲルから学びました。感性というのは、感覚能力のことですが、哲学においてもその感性を重視しなければなりません。感性的な存在だけが真実の存在であるとフオイエルバツハは考えたのです。この話をすると長くなるので止めますけど、私は国際フオイエルバツハ学会の副会長なので、フオイエルバツハのことを宣伝するのも国際的使命かもしれないませんが、そもそも私がフオイエルバツハを習ったのは暉峻僚三先生からでした。

暉峻先生は若い時にはカント研究者で、先ほど名前を出しました出隆先生が編集された『哲学の基礎問題』（実業之日本社、一九四九年）という論集で、カントをもとにして「感性」という項目をお書きになっています。そこでカントの論理学講義——これはあまり知られていない本ですが——を取り上げていて、その中でカントは、ギリシャ人が初めて抽象的理性使用としての哲学を始めたけれども、これに対して具体的理性使用というものが別にあって、それこそが〈gemeine Erkenntnis〉であると言っています。〈sainen〉という形容詞は、一般用語としては卑俗とか低俗とか、あまりいい意味では使われないものですが、暉峻先生は、この〈gemein〉というのは決して卑俗という意味ではなく、一般の人間が基本的に持っている態度だというふうに解釈しています。つまり、ギリシャ人が始めた抽象的な理性使用こそが重要で、具体的理性使用というのは卑俗な認識の仕方だとは考えなかったということです。これは暉峻先生が勝手に解釈したようですが、しかし当たっているんじゃないかと思うんです。

カントには三批判書というのがあって、最初のが『純粹理性批判』という非常に有名な本ですが、そのはじめの方で、人間の認識には二つの源泉があると言われています。それは感性と悟性です。感性というのは、外から現象を受け取る感覚能力ですね。目、耳、鼻などを使って、人間は外からいろんな現象を取り入れている。

ただし、『純粹理性批判』では非常に有名な言葉ですが、我々の認識はすべて経験によって始まる。しかし、我々の認識は経験によって始まるからといって、すべての認識が経験によって成り立つわけではないと言われます。つまり、感性・感覺能力によつてまずは外から情報を得るのですが、次に悟性が働きます。悟性はカテゴリーとも言われるもので、いわば論理的な網の目です。その悟性の網の目に引っかけて、引っかかるものだけが認識できると。カントはそのような意味で、人間の認識能力には二つの源泉があると言いました。

それでそこから、理性というものが重要だと言われるようになって、カントをもとにしてドイツ観念論が生まれたという一般的な哲学史の解釈があります。しかし暉峻先生の解釈を援用して、私がさらに拡大解釈していくと、ドイツ観念論に続くような流れも、もともとは感性によって現象世界をとらえるということが重要だったのではないのでしょうか。確かに、一方でカントの生きた時代というのは、ライプニッツやヴォルフといった合理主義哲学が流行つており、理性に合致する哲学というものが脚光を浴びていました。そういう理性尊重主義の傾向がドイツにはあり、またフランスに行くとき啓蒙主義も流行していました。〈啓蒙〉というのは無知蒙昧を啓くといった意味で——今は差別的だから〈啓発〉と言ったりしますが——無知蒙昧というのは良くないという考えがあります。それで、無知蒙昧を何によつて啓くかというとき、理性の光によつて啓くのです。フランス語で〈啓蒙〉のことを〈lumière〉と言いますが、これは光という意味です。理性の光によつて、無知蒙昧な人間の認識を啓くのが啓蒙だということですから、要するに、カントが生きた一八世紀というのは、理性が非常に重んじられた時代だったのです。

ではやつぱりカントも理性尊重主義者かというとき、それだけではないのではないかと。理性が有効に働くためには、なんといつても最初に感性から出発しなければならぬ。人間は、感性によつてとらえた現象しか認識でき

ません。感性によってとらえられないものもあるかもしれませんが、しかしそれは人間には認識不可能です。感性を通してとらえたものを悟性によって整理して認識が成り立つということは、逆に言えば、感性を抜きにして認識はありえないということなんです。その意味で、カントほど感性というものを重んじた哲学者というのはいないんじゃないかと言うことができます。哲学史上、感性の重要性を位置づけたのは、フォイエルバッハ以前にカントだったのではないかと思うんです。

もちろん一八世紀に生きた人ですから、カントもまた、ライプニッツ、ヴォルフの合理主義やフランス啓蒙主義の影響を受けていて、理性の重要性は十分に認識しています。だから理性がだめだと言ってるわけじゃなくて、あくまでも感性の重要性を理解したうえで、理性というものを見直すべきだと言うわけです。理性一辺倒が暴走したら、逆にとんでもないことになってしまふ。だから感性を大事だと言いながら理性を重んじるという場合、カントはそれをどう頭の中で整理するかというと、そうした考え自体が理性によってなされているので、理性自身が理性を自己批判的にとらえて自らの意義や限界みたいなものをきちんと解釈しなければならぬ。カントは『純粹理性批判』の中で、そういうことを書いています。理性批判というのは、理性の能力の有効性と限界性をきちんととらえることを目指したもののなんです。

さて、ここからこの講演において重要な話に入っていきます。今までの話を井上円了先生から考えてみたいと思います。井上円了という人は、世間的には妖怪博士という名で知られていますが、円了先生の妖怪学はしばしば〈妖怪退治〉ということで語られます。テレビ番組などでも円了は妖怪退治を行ったと紹介されたりするわけですが、しかしそれはあんまり聞こえが良くないんですね。要するに、妖怪なんてものは下らないもので、そんなものに囚われてはいけないという〈妖怪バスター〉みたいなイメージですね。妖怪なんてみんな理性で簡単

に解釈できる、どこそこで幽霊が出たと言っても、単に木が揺れたただけだみにね。柳田国男なんかもそうですが、だから円了さんはつまらないんだ、次から次へと説明しちやってつまらない奴なんだと言う人もいるわけです。

しかしこのようなことは、円了の妖怪学の本を読んだことのない人が言っているにすぎないと私は思います。円了先生が妖怪退治を行ったとしても、それは決して啓蒙主義、つまり無知蒙昧な大衆を理性ないし悟性によって目覚めさせるんだ、というものではなかったんです。先ほどの話と繋げて言いますと、カントが感性を重視して、それによって理性の意義と限界を明らかにしたとすれば、円了先生も同じようなことをやったわけです。

一方で円了先生の妖怪学というのは、確かに、一般に対して迷信や俗信といった妖怪現象を恐れる必要はないと説くものではあります。実際にそういった妖怪に人々の生活が左右されているという現状もあるわけです。ただし、そうやって説明される妖怪というのは、円了先生からすると、仮の妖怪（「仮怪」）、偽の妖怪（「偽怪」）にすぎません。それらは、ある意味では、分別悟性や理性によって退治することができるものです。

ところがそれだけではないのです。いろいろ調べてみると、むしろその分別悟性や理性から生まれてくる妖怪もあるんです。決して無知蒙昧な民衆が間違った考えをもって、迷信に惑わされて困っているというだけでなく、それを説明するはずの悟性や理性が妖怪を生み出すこともあると、円了先生はおっしゃっているわけです。カントにならって円了先生の妖怪学を考えますと、まず重要なのは、悟性や理性の助けを借りて感性や直観に磨きをかけてことです。決して悟性や理性が感性や直観よりも大事であったり、重要であったりするわけではない。人間がもっている感性や直観というものを有効に活かし、大切にすべきである。そうすることによって、仮の妖怪、あるいは偽の妖怪ではない、真実の妖怪（「真怪」）に出会うことができる、円了先生はおっしゃっている

と私は思います。

では真実の妖怪とはいかなるものなのか。これはなかなか難しいですね。真実の妖怪とは何かという問いは、円了においては真理とは何かという問いと重なるもので、そう簡単に答えることができません。ただ、円了先生が書かれたものに即して解釈すると、二つあると思います。

一つは〈自然〉です。引用してみましよう。

仰いで天文を望めば、日月星辰、秩然として羅列するもの、一つとして妖怪ならざるはなし。俯して地理を察するに、山川草木、鬱然として森立するもの、またことごとく妖怪なり（井上円了『妖怪学講義緒言』〔『井上円了選集』第一六卷、二二頁〕）。

つまり森羅万象ありとあらゆるものはみんな妖怪だと言うわけです。太陽も月も星も妖怪。風や雨も妖怪。山や川もみんな妖怪。ということは、早い話が自然現象すべてが妖怪だということですよ。そしてさらにこういうこともおっしゃっています。

この世界は実に広大無辺の教育場にして、万物万端を備具せる大学校なり。星辰も教師なり、山川も教師なり、ないし禽獣虫魚、木竹草苔みな教師ならざるなし（井上円了『教育総論』〔『井上円了選集』第一二卷、四二八頁〕）。

太陽や月や星、山や川、動物や虫や魚、木や草、こういった自然すべて教師でないものはないと。先ほど、真実の妖怪とは何かという問いを出しましたが、本当に私たちが取り組まなければならないこと、考えなければならないことというのは、仮の妖怪や偽の妖怪ではなく、真実の妖怪である。例えばそれはどんなものかと考えると、ありとあらゆる自然現象を、まずは真実の妖怪としてとらえることができる。そしてそれが同時に教師として、つまり私たちに学ぶべきものを教えるものとして現れるというわけです。円了先生はそういうにおっしゃっているのだと思います。哲学というのは真理の探究のことですが、円了先生の哲学は、ある意味では妖怪学なのではないかとも思います。そうすると哲学の究極の研究対象というのは、真実の妖怪、すなわち自然ということになると思うんです。

アリストテレスにとってもカントにとっても、そして今回触れることが出来ませんでした。フョイエルバッハにとっても、〈現象の救い〉という場合の〈現象〉とは、何か目に見えないものではなくて、いまここで感性的にとらえることができる自然のことだと思えます。その意味で上記の哲学者たちは、自然というものを重要視して哲学的思索をされてきた方々であると思えますし、まさしく井上円了先生も、自然というものが本来持つている意味をきちんととらえ直そうとしたのだと思います。

そして真怪についての二つ目の解釈に移ります。結局のところは一つ目と同じことにもなるのですが、それは〈自己自身〉です。信太先生の言葉をお借りしますと、先生は〈現象の救い〉ということを経験提唱されましたが、それは感性的な対象にまなざしを向けるということだけではありませんでした。つまり、アリストテレスのように論理的に感性的なものを救い出すというだけでは論理主義に陥ってしまう可能性がある。それゆえ〈現象の救い〉のためには、むしろソクラテスにまで遡って、自分自身の魂の問題として掘り下げなければならない。つま

り、実存の探究というところまで行かなければならない。信太先生はそのようにおっしゃっていますし、私もそうだと思います。

現象を救うという場合の〈現象〉あるいは〈自然〉と、それをとらえている〈自己自身〉を同時に追求しなければならぬ。カントの理性批判というのは、理性による批判であるだけでなく、理性に対する批判でもありました。理性の自己批判こそが、カントの理性批判の本丸であると思います。そして理性が理性を批判する際の核になるものは、何よりも感性なんです。感性を抜きにして理性だけでやっていくのは無理なんだということを、カントは非常に強調しました。

それで『純粹理性批判』というかちでまとめたんですけど、しかし次にこれを実践理性、つまり人間の具体的な生き方、あるいは道徳的判断に当てはめようとする場合に困った問題が起こります。というのは、カントの考える道徳的な主体というのは、感性あるいは感覚に捕らわれてはいけません。徹底的に理性的に考えて、自分自身が真実だと思うものを追求していかなければ、人間は決して自由にはなれない。感性というのは「傾向性」の源泉であり、人の言葉について影響されたり、欲望のままについてしまったりして、流されてしまう。そういったものをすべて振り払って徹底的に生きていかないと、道徳を追求することはできないとカントは考えています。つまり一方では、感性なしに認識はありえない、人間は感性でとらえた現象しか認識できない、だから感性が重要であると言うのですが、他方、実践理性の話になると、カントの考え方では、感性が重要だと言うとまづいことになるんです。とはいえ理性だけいいかというのと、理性は二律背反、アンチノミーという自己矛盾に陥ってしまう。要するに、感性を重視しようとすると実践理性で躓いてしまうのです。

そういうわけで、カントは『実践理性批判』というところから、「根源悪」の問題に突き当たります。人間は理

性的な存在でありたいけれども、『純粹理性批判』で言われたように、やはり現象世界の中で生きている。そうすると、どうしても自分の中から出てくる「悪」みたいなものと戦わなければならなくなる。つまり理性だけでやっていこうとしても、実際には根源悪の問題に突き当たって、それを真剣に考えなければやっていけないというふうに、カントは悩むわけです。ここがカントの面白いところでもあります。

以上をまとめますと、感性的存在者であることは、いわゆる煩惱に日々苛まれる〈この身〉であります。その私がいかにして道徳主体でありうるのか。批判主体ないし道徳主体としての理性的存在者ではなく、悪への自由すら有する人間としての私という根本問題、これを考えなければならぬ。これが十九世紀以降の、そして私たちの実際の〈身〉のあり方ではないかというふうに、カントから解釈することが出来ると思います。

真怪というものを〈自然〉と〈自分自身〉という二面で考えましたが、これは本当に謎として私たちに突きつけられるものです。漱石じゃないですけど、世の中に悪人なんていないんです。普通だと思われている人間が、突然悪人になるから恐ろしいんです。私だって、いつ悪人になるかわかりません。今のところまだ多少は前を向いて歩いてますけど、これからどうなるかはわかりません。それが人間の実態じゃないでしょうか。

そういうことを考えた時に、あらためて井上円了先生から何を学ぶことができるでしょうか。この哲学堂公園というのは、円了先生がおつくりになったものですが、入り方、歩き方というものがあります。多くの人は、正門である「哲理門」から入りますが、本当はその向こうに「常識門」というのがあるんです。人間は生きている時は常識で生きてるわけです。常識というのは〈gemine Erkenntnis〉ですが、決して卑俗なものではありません。英語で常識は〈common sens〉とも言いますが、これは「共通感覚」とも読めるんです。むしろ理性の方が一面的な見方で、常識の方が幅広く見れるので、決して悪いものではない。普通の人間が生きているのは常識であり、

哲学堂公園には、本当はその「常識門」から入らなければならないんです。

それで「常識門」から入っていくと、昔は受付みたいなものがありました。その後に「髑髏庵」というのがあって、そこで世俗の垢を落とします。そこから降りていくと、「経験坂」というのがあります。先ほどの話と繋がりますが、人間が真理を探究しようという場合には、経験から始めなければならない。つまり感性が大事、感性抜きに真理は語れないということです。だから感性を重視する経験坂を降りていきます。そうすると次に、「唯物園」というのが出てきます。それは物質の世界を表したもので、人間の認識が最初に触れる世界です。しかしここで振り返る必要があります。物質を見ているのは誰なのか。それは私である。では、どうやって見ているのか。目を使って見ている。では、その目は物質だけど、目がなければ見えないのか。そんなことはない。結局何で見ているのかというと、心で見ているということになります。こうして物だけでなく心の世界が開かれます。これが「唯心論」の世界であり、哲学堂公園では「唯心庭」として表現されています。こうして世界には「唯物」と「唯心」の両方があることが明らかに、真理の探究はだいたい進んだことになります。

では物と心を総合したらどうなるのか、というところで「認識路」が現れます。これはけっこう急な坂で、簡単には登れません。雨の日なんかはすべてしまいますが、その認識をきちんと論理的に追及していく。そうして坂を登りきって見えてくるのが「絶対城」というお城です。「絶対」の世界、「南無絶対無限尊」の「絶対」に到達するんです。しかし絶対城とは何かというと、実は図書館なんです。当時置かれていた本は、今では東洋大に寄贈されてそこにはないですが、図書館というのは、結局、先人たちがいろいろなことを考えた成果が詰まっているわけです。自分自身が絶対城に入って、今度は俺が王様だという話ではありません。絶対城まで来たら、自分自身が勉強しなければならないんです。

そうやってだいぶわかってきたところで、最後に出口があります。「理外門」というのがああるんです。そこを出ると、再び世俗の世界に帰っていくわけです。

哲学堂公園というのは、このように上手くできているんです。常識門から入って、常識とは何か、経験・物質とは何か、人間の心とは何か、といったことを問わせる。そして、認識を論理的に積み上げて行って、少しわかった気になるけど、君がわかったという程度ではなく先人がこれだけの本を残しているよ、と示すんです。それをまずは読まなければいけないということで、一生懸命勉強する。でもそれで終わりではありません。竹村牧男先生がよく引用されていますが、円了先生の言葉に「向上門は方便、向下門が目的」（井上円了『奮闘哲学』（『井上円了選集』第二巻、二三五頁））というものがああります。「向上門」というのは真理の知的な探究のことであすが、それが目的ではない。真理を探究し、見出した後には、そこから下りていかなければならない。つまり真理の世界から現実世界に戻り、実践しなければならぬ。そういうわけで円了先生は、哲学館・東洋大学をつくったり、哲学堂公園をつくったり、全国巡講を行ったりされたわけです。それと同じように、私たちも哲学的思索を重ねて絶対域まで来たら、そこから門を出て、現実世界に向かっていかなければなりません。私も大変な場所で講演させていただいていますが、これから哲学の外の世界で生きていかなければならない。いつ悪人になるかわかりませんが、そういうことがないように、哲学の精神を大切に生きていきたいと思ひます。ご清聴ありがとうございました。